

サッポロを作った古河川と豊平川の成立過程

株式会社アイピー(地質情報室) 宮坂省吾

1. サッポロはどこだ?

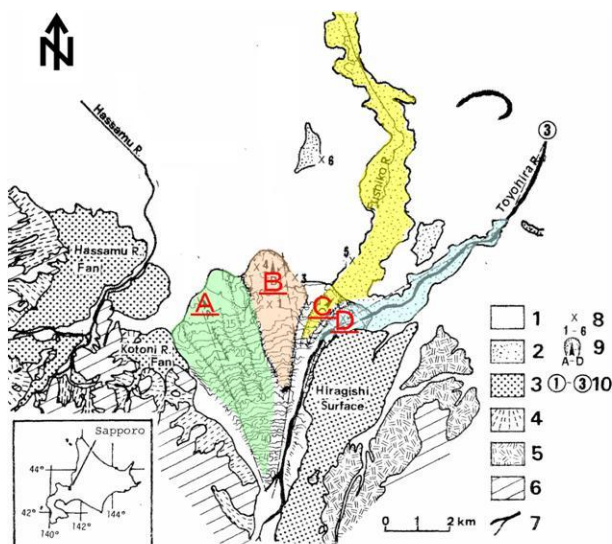
札幌の地名の起源については、榊原(1998)が“サポロペツ sap・oro・pet (大量の水)下る・所の・川”と解釈する提案をしたように、定まりきれないものらしい。

山田(1965)は、サッポロが少なくとも 300 年前からアイヌの人たちによりサッポロ(乾いた・大きい)ペツ(川)の下略のつもりで呼ばれ、地形上その意に合う「パラピウカ(広い・石川原)」がその名称の元来の場所だと考えた。そこは平岸の段丘の下から中島公園までのあいだに広がっていた広い河原のあたりで、広く解釈するとサッポロは豊平川扇状地の札幌面に相当すると考えることができる。

さらに 2000 年前に成立したサッポロ川は北に向かって砂質の自然堤防を作り、石狩川の近くまで到達している。この砂地もまた乾いた大きい土地で、サッポロであったかも知れない。こう考えると、サッポロの起源は札幌市の北端シノロ(旧篠路村)あたりでも良いということになる。

2. 豊平川扇状地(札幌面)の形成

大丸(1989)は、豊平川扇状地の札幌面(第四紀更新世)を 4 つの舌状地(A~D)に区分した。



豊平川扇状地札幌面の区分(大丸 1989)

主にコトニ川によって北北西方向に運ばれた砂礫が舌状の微高地 A を作った(10,000~6,000 年前)。内部に刻まれた幾筋かの流路が砂礫の運搬を担ったのだろう。3,500 年ほど前から流路を真北に変えて、北 15 条付近まで前進した舌状の微高地 B が形成された。岩屑の供給が増大し、礫質の自然堤防が一気に発達したらしい。

微高地となった扇状地を避けた流路は、さらに東に寄って北東へ流れ、サッポロ川が 2,000 年前頃に成立した。扇端に小さな舌状地を作り(C, D)、その下流の低湿地上に砂質の自然堤防発達させた。

3. 札幌面を流れていた河川

札幌面を流れていた河川は、ヨコシペツ川・コトニ川・サッポロ川に区分される。札幌沿革史(札幌史学会 1897)や山田(1965)によってこれらの各河川を復元した(古河川図に示す)。

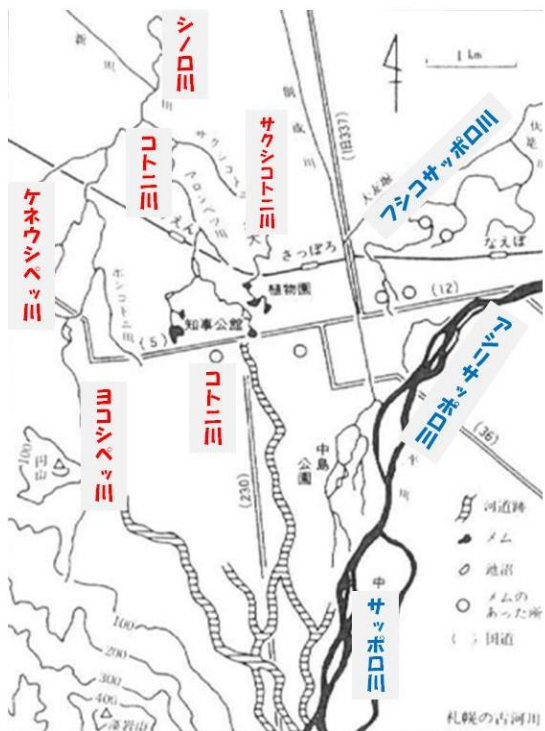
サクシコトニ川やチェブンペツ(セロンペツ)川を含むコトニ川、西縁にはヨコシペツ川やケネウシペツ川などの支流が流れていた。これらは縄文時代の扇状地を作った“古いサッポロ川”の名残である。サッポロ川は上流を現豊平川・下流を現伏籠川とした舌状地 C に関連した流れであったが、1800 年頃のツイシカリ川の河川争奪により主流路が東へ替わり(山田 1965)、舌状地 D を作り始めた。

3. サッポロ川流路変更によるフシコ川と豊平川の成立

山田(1965)は、アイヌ語地名解釈に基づいて、モエレ(旧名モイレ)沼を経由して東へ流れたサッポロ川蛇行の時代があったかも知れないと考えた。サッポロ川がフシコヘツエシヤン(フシコ川のイチャン

(堀):大通東 5 丁目付近)から北へ流れ、東へ転じてモイレ川の川口(モイレペップト)からモイレ川(モイレペッ)へ流れ込み、南進してトーパロ(モエレ沼の沼口)でツイシカリ川に出て、ツイシカリプト(ツイシカリ川の入口)で石狩川に合流していた。

その後、サッポロ川によるシノロ川の河川争奪が進行し、18 世紀中頃の「石狩山伐木図」に見るように、双方は合流してサッポロプト(サッポロ川の入口)で石狩川に流出していた。争奪の完成によってモイレ川は放棄流路となり、“サッポロ川の大蛇行”は終了した。サッポロ川から分離されたツイシカリ川は、厚別川などからなる小川になっていただろう。



札幌の古河川図

サッポロ川は、もう一回、大きな流路変更を起こす。1801 年頃に大洪水によってサッポロ川の流れが変わり、いったんサッポロ川から切り離されていたツイシカリ川に併合された。この段階で、これまでのサッポロ川をフシコサッポロ川(フシコ川)・ツイシカリ川に併合された川をアシリ(新しい)サッポロ川と呼ぶようになった。双方は幕末までつながっていたらしく、フシコヘツエシヤンを通じてフシコ川へ分流し、モイレ川はその氾濫を受けて広い沼地となってトーパロからアシリサッポロ川へ流出していた(山田 1965)。

その河川争奪は、開拓使による札幌本府の建設で加速され、アシリサッポロ川(豊平川と改称)からフシコ川を切り離してしまった。また、豊平橋は幅 500m もの網状流を本流の 60m ほどに狭め、堤防を敷設することによって流路を固定して、ついにパラピウカを失った。

おわりに

山田秀三(1899-1992)は、金田一京助(1882-1971)・知里真志保(1909-1961)や高倉新一郎(1902-1990)ら碩学の学問的援助を受け、「北の都の、消え去った山河の名を懐かしみつつ」アイヌ語の検討によって札幌の地名を解き明かしていった。彼は昭和 30 年代に幌平橋でパラピウカを見つけたが、それは豊平川の複断面化(低水路工事)が進められて完全に失われてしまった。

いまとなつては、サッポロの原風景は見出しにくい。しかし、扇状地に関わる河川の変遷を理解すること、いまに残る河川地形を記録して語り継ぐことが、山田たちの業績を知る者の仕事と思う。それは、過去に豊平川で起ったことや、これから起ることを考えるための基礎資料となるであろう。

2016 年春巡検は、わずかに残る洪水痕跡と失われた河川地形を辿ってみる。紹介者の理解が正しいか、良く考えてみよう！

この巡検が原風景復元へ道を開けば、嬉しいことである。

<文献>

大丸裕武(198)完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程. 地理学評論 62A-8, 589-603.

榎原正文(1998) 豊平川を中心とした石狩川水系の河道変遷とその周辺のアイヌ語地名について. アイヌ語地名研究 1, 1-10.

山田秀三(1965)札幌のアイヌ地名を尋ねて. 楡書房.